

主題科目の自己点検「日本の社会と表現文化」

中 川 洋 子 (愛知教育大学教育音楽教育講座)

Yoko NAKAGAWA (Department of Music Education, Aichi University of Education)

はじめに

大学の法人化後、大学改革の中で共通科目改革は2000年から始まった。「入門」「展開」「セミナー」と3年間を継続した授業編成が行われ、その中で改善のために毎年アンケートが実施され、労力と時間がかけられてきた。

その結果は「教養と教育」に、＜共通科目の授業改善のための調査報告Ⅰ～Ⅴ＞として載せられ、授業の改善の一助となっている。発足当時と比べて理想とした授業になりつつあるのだろうか。共通教育としての課題の達成は出来ているのだろうか。今回この報告を書くに当たり、創刊号から7号までを読み返し、経過を辿り、グループの課題の達成について考察する。

グループのメンバー (H19/4) 敬称略

- I 群 岩田吉生 (障) 風岡正明 (国)
 田澤基久 (国) 矢島正浩 (国)
 衣川彰人 (国) 前田 勉 (社)
 野地恒有 (地シ) 隈本浩明 (音)
 富山邦夫 (美)
- 2 群 梅澤由紀子 (幼) 渡邊和靖 (社)
 高瀬正一 (国) 木村博昭 (国)
 西田谷洋 (国) 伊藤貴啓 (社シ)
 中川洋子 (音) 黒澤千春 (美)
 野澤博行 (美)

- 3 群 大村 恵 (学校) 佐藤洋一 (国)
 西宮秀紀 (社) 中筋由紀子 (社シ)
 磯部洋司 (美) 中島晴美 (美)
 遠藤 透 (美) 井戸真伸 (美)

授業目標

日本の社会と表現文化における諸問題に関して、「入門」では教育学的、人文・社会的、芸術的な分野からアプローチし、基礎的な知識を理解するとともに幅広い教養を身につける。「展開1・2」においては「入門」で得た知識を基に、諸分野での研究方法や表現方法を学ぶ。「セミナー」では、「入門」・「展開」を通して学生が抱いた問題意識や関心に基づいて、論文作成や創作・演奏の実践へと発展させる。こうした段階的な学習を通して、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを目的とする。

授業担当方法

グループは3つの群に分かれ、当番群のメンバーで3年間担当している。プレ講義は群の全員が担当。「入門」は群内の順番制で3名が担当。「展開」「セミナー」は群の全員が担当し、「展開」「セミナー」共に8～9枠開講している。

アンケート結果一覧表

年 度	12年度		13年度		14年度	15年度				16年度		17年度		18年度	19年度	
種 別	入 門	展 開 1	展 開 2	入 門	セ ミ ナ ー	展 開 1	セ ミ ナ ー	入 門	展 開 2	展 開 1	セ ミ ナ ー	入 門	展 開 2		展 開 1	セ ミ ナ ー
期 別	(後)	(前)	(後)	(後)	(前)	(前)	(前)	(後)	(後)	(前)	(前)	(後)	(後)		(前)	(前)
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%		%	%
積極的に参加した	92	88	90	81	96	89	95	92	92	93	93	—	—	教 員 ア ン ケ ト	74	87
得るところがあった	83	84	92	81	98	89	99	87	89	95	90	91	80		79	91
触発されて学習した	68	31	45	22	76	56	64	33	43	72	81	48	47		33	63
満 足 度	91	87	94	86	94	87	97	90	85	95	89	—	—		—	—
学習時間	0時間	52	57	45	72	33	52	41	66	56	46	34	41		49	51
	0～1時間	24	39	37	28	32	34	36	30	30	42	46	39	33	35	31
	1～2時間	10	4	16	0	13	8	9	3	7	6	4	13	18	11	24
	2～時間	16	0	2	0	25	7	13	1	7	6	16	6	0	3	13
達 成 度	調 査 無 し					80	87	91	73	89	87	—	—		61	80

アンケートの結果

アンケートの質問項目が変わったり、実施されない時もあったので、初年度から可能な範囲で集計を行った。項目は当初から比較的毎回問われているものを取り上げた。表の数値は「あった」「多少あった」と「満足」「やや満足」の合計である。「セミナー」ではどの項目も高い数値を示していることに注目したい。19年度は数値が低いがそれでも「展開」より「セミナー」の方が数値が高い。学生は「セミナー」を主体性を持って受講しているといえる。

問題点について

「教養と教育」の＜共通科目の授業改善のための調査報告Ⅰ～Ⅴ＞、18年度に行われた教員のアンケート、グループ会議を参考に問題点を挙げた。

① 受講システム

柱の選択は第一希望を尊重して欲しい。「入門」は専攻で枠が決められているため選択の自由がないので枠を外して欲しい。「展開」の開講を複数曜日にして選択の自由を広げて欲しい。授業による学生の人数格差は開講している教員間での調整が原則であるが、人数を公平に配分するシステムが望ましい。

② 積み上げ

発足当時と構成員が変わり、「入門」の3枠が同じ分野の教官の開講になる可能性がある。「展開」から他分野の教官が加わることになるため、継続した積み上げは「展開」「セミナー」と2段階となる。そのため「展開」から「セミナー」への積み上げはかなり意識して努力はしているが、毎年同じ講義をするのとは異なり、「展開」の様子を見ながら「セミナー」を工夫することになり教官に負担となっている。また教官側は積み上げの工夫を行っても、学生側は時間割を優先して、それとは関係のない選択を行っていることもある。主題科目での学びの目標を「第2の専門」とするなら積み上げは必須である。その場合は柱を越えての受講や、深い学問的欲求が生じた時は専門が変わることがあっても良い。また主題科目での学びの主な目標は学生のアンケート結果によれば「幅広い知識の習得」「知的刺激」「文化の共有・獲得」である。同じ教官による積み上げでなくても、それぞれ専門の教官の講義を受けることで達成される。この主題科目の目標の選択は学生に任せてはどうか。

③ 評価

全学的に評価のあり方が問われているが、当グループは多分野の教官で成り立っているため統一を図ることは極めて困難である。しかし選択の余地が狭く、専攻によって振り分けられている「入門」においては、不公平が起こらないよう次の点に留意している。初回の授業やシラバスにおいて、評価方法・評価内容を学生に明示する。評価に出欠状況を加味する。授業にお

ける学生の意欲を評価する。

④ 教官の連携

専門が多岐にわたるため親密な連絡が取り難い。グループ会議を実のあるものにするために、欠席の場合はメールやファックスで意見交換が出来る体制が望ましい。それが不可能なら「柱」の編成の再考が必要であろう。

おわりに

この報告を書くにあたり、グループのこれまでのコーディネーターと共通科目委員の「教養と教育」に書かれたもの、会議の資料として配られたもの等を参考にした。その中でいつも同じような問題点が指摘されているのになかなか変わる様子が見えない。そこで教官と学生に時間割作成者である事務官も加わって、シンポジウムを開き、受講システムを含めた主題科目の改善を討論する機会をつくることを提案したい。